

方言と國語教育

一 標準語から共通語へ

1 方言の概念

方言をどう見るかについては、有力な二つの見解が對立している。

一つは言語學者の見解で、他は民俗學者のそれである。前者によれば、方言とはその土地に行なわれる一切の言語現象である、とするのであるが、一般の國語學者も多くはこの立場に賛成しているようである。この見解にしたがうときは、標準語と共通する言語現象であつても、それがその方言社會のものであるかぎり當然方言と見なされる。これに反して民俗學者らは、標準語と共通の言語現象は一切かえりみず、もつぱら標準語となにかの点でちがつた言語現象だけを問題にする。

そのなかでも、單に音のすがたのちがいにもとづくことばは、これをなまり（あるいは訛語）として別にとりあつかひ、なまり以外の原因で語形のもがつていることば——いわゆる土語（あるいは俚言）に主力をそそぐ傾きがつよい。なかには、たとえ土語であつても、もはや「言海」に登録されたものは一應はぶいて、研究能率の向上をはかる

うとするひとびと（たとえば柳田國男氏ら）もある。

民俗學的方法による方言の研究がいちじるしい効果をあげたことは、「蝸牛考」その他の業績によつて人のよく知るところである。實証された古い語形が、日付けの明らかでないという点で、積極的に國語史の資料としては利用されにくいとしても、それにもかかわらず從來の研究の欠陥をおぎなうための極めて新鮮な風を吹き入れた功績をうたがう人はあるまい。（民俗學的方法是、實質的にはジリエロンなどのとなえた言語地理學の方法と一致すると見られる。参照、ドオザ（松原秀治譯）「言語地理學」）

しかしながら、もし方言というものを、一つの言語体系として、嚴密な立場からとらえようとするならば、單に標準語と違つた形のことばだけを取りあげるにとどめるのは不十分であろう。土語中心の方法がもたらした偉大な結果はよくわかるけれども、言語狀態の体系的、包括的な把握をめざすかぎり、民俗學的方法是、實用的立場におちてしまふ危険が大きい。そのうえアクセント研究の立場から言つと、民俗學的方法是、完全に無力である。マツ（松）とかムギ（麥）とかのよう、全國どこへ行つても共通にマツ、ムギであつて方言量がゼロで

見 坊 豪 紀

あるようなことばの研究というものは、土語中心の立場にたつかぎり全然意味がないのであろうが、アクセント研究者にとつては、このような全國共通のことばこそかえつて眞に比較研究の對象でなければならぬ。その意味で、民俗學的な土語中心の立場と、アクセント研究者の共通語中心の立場とはまさに正反對である。

もちろん、この二つの立場が方言研究上たがい排斥しあわなければならぬということはなく、研究の對象によつて二つの方法を適切に使いわけてもかまわないわけである。しかし一つの言語社會における言語狀態を体系的にとらえ、これを、同じ原理によつてとらえられた他の言語狀態と比較しようとする方法にしたがうかぎり、アクセント研究者の立場は、ついにアクセント研究以外の分野にまで擴張されなければならないのである。

2 國語教育と方言

方言社會における國語教育に方言というものがどうしても混入してくるとするならば、教師はこれを取りあげなければならない。取りあげる以上は、いわゆるなまりや土語だけでなく、アクセントや文法の面までも取りあげなければならない。前述した土語中心の立場で方言をとりあげると、いきおい言語の全面にはふれないで、單にその一面だけを強調する欠点を生みやすい。ひいては、方言とは單に矯正されるためだけの言語にすぎない、というあやまつた觀念をうえつける結果におわるかもしれない。もつとも、標準語とちがつたものをとりあ

げるということは、當然、何が共通の要素であるかということ的前提とするはずだから、土語中心の方法がかならずそうした欠陥を生みだすとは言わない。けれども言語狀態の体系的把握をねらうのとねらわないのでは、實際面にかんがりのちがいが出るのではあるまいか。

すくなくとも國語教育に關しては、あくまでもすべての部面をふくむ、廣い言語現象としての方言をとらえることがまず必要であると思うのである。たんに方言の特殊性だけを問題とするのではなしに、(方言と標準語、ある方言と他地方の方言との)共通性をあわせてとらえ、かくすることによつて方言という一つの言語狀態を、構造的、ある全体として理解することが望ましい。土語中心の方法は、ある方言の特色や位置づけをかんたんに知らせる点ではきわめて有益であり、生徒の興味をひきつける点から言つても利用價值は大きい、その限界を指摘するとなれば以上のようなものである。

みぎにのべたことは、國語教育上方言をどのような観点からとらえるべきかについての私の意見である。しかし私の言いたい趣旨は、方言についての觀念的な認識——方言は一地方に行なわれる言語現象の全体を言う、といった程度の空しい定義づけで満足していい、という点ではない。これでは残念ながら完全に觀念論であつて、そこからは何ら適切な對策もうまれないのである。

方言と標準語との間にある共通性と差異性をあわせて認識、認識すること、あるいは、さらに一步を進めて、共通性の上に立つた特殊性を構造的に知るといふこと、これがなされないかぎり方言の認識と言

つてもひつきよう空論に終り、價值ある具體的實踐の多くは期待することがむずかしいように思われる。方言はもつとちがつた角度からながめられ、捕えられなければならない。安藤正次博士が「國語學」にのべられた見解などは、その意味ではなほだ參考になると思うのである。(1)

(1) 安藤正次「國語學」14頁(昭和24年三省堂)

「方言」というのは、同一國語内における言語の現象の、地域を異にするによつてあらわれる差異を認めた場合、その差異的關係に立つている、それぞれの地域の言語をさしているに用いられる名目である。」(傍點は見坊)

3 方言の規定

一般の學者が方言をどう規定しているかということについては、この章の終りを見ていただくことにして(付録參照)、前述の観点からみたわたし自身の方言の規定のしかたを以下にのべる。

わたしは、方言とは共通性の地盤の上に特殊性をそなへ持つた一つの言語体系である、と考える。共通性とは、いわゆる標準語や他の方言と共通な性質ということであり、特殊性とはその方言が標準語や他の方言から區別されるいろいろの特性をさす。そして、それらの共通性と特殊性とをあわせもちながら、しかもそれ自体一つのまとまりのある全体として他から區別されるところに、わたしは方言の体系性を、一層適切には方言の構造性をみとめようとするのである。

つぎに方言というものは、いつでも全体として標準語や他の方言と對應關係にたつ。わたしたちがある方言形を問題にするということは

具體的にはある方言体系における、一つのことを問題にするということである。そうとすれば方言というものは、じつは無意識のうちに、全体としていつでも問題にされているものであり、一つのことばというものも、じつは全体の言語狀態の一部分としてのことばという構造において捕えられているものである、ということがおのずから理解されるであらう。また對應關係ということばは、方言を標準語または他の

方言との比較の關係においてながめるとき、共通の關係と差異の關係とを同時に表わすために考案されたことばである。對應ということばは單なる一致の關係ではないがゆえに同一ということと區別され、また單なる差異の關係でもないがゆえに對立とは別な概念である。對應という考え方は、方言全体についても、また方言体系の一部分についても適用されることのできるものであり、特に方言体系の一部分の考察にさいしてこの概念は有効である(後述參照)。また、對應の概念を方言体系全体に適用するときは、當然、地理的對應(1)地域的にみた共通性と差異性(2)がまず考えられ、これは方言研究者のすべてが、方言研究の前提として承認している事實である。しかし全体としての對應關係にはこのほかになお時間的對應(2)時間的にみた共通性と特殊性(2)がある。ソシュールも言っているように、地域的對應はけつきよく時間的對應に還元されるのであるが(參照「言語學原論」改譯新版二六七頁)、しかし、このことは、すべての地域的對應がことごとく時間的對應に還元される、という意味に解釋すべきではないのであらう。柳田國男氏も力說されるように、地方に發生した新語というものもな

かなが多いからである（参照、柳田國男「國語史・新語篇」その他）。以上のべたように、對應關係という考えはたんに方言の特殊性だけを強調することを意味するものではない。そもそも特殊が特殊として認められるのは、その地盤に共通性が予想されているからなのであつて、共通性のないところにじつは特殊性などは考えることができないはずである。方言の特殊性を説くのはけつこうであるが、それだけで方言の把握が終つたと考えるならば、いささか早すぎると言うべきであらう。

第三に、方言は、單に、全体として他の言語体系と對應するばかりでなく、さらにその各部分もまたいちいち標準語や他の方言のそれぞれの部分とあい對應する。（部分というものがけつして單なる部分として孤立するものではなく、部分が部分としてみとめられるためにはかならず全体というものが地盤として予想されるということ、しかもその全体が他の全体とつねに對應していることを考えるならば、全体のなかの一部分が、他の全体のなかの一部分と對應することもまた當然であらう。）方言に對する第三の規定は、決してたんなる抽象論にとどまるものではない。方言という言語体系の一部分を標準語に言いかえたり、また他の方言と比較したりするばあいには、つねに全体の中におけるその部分の位置を考えつつ對應するものを求めなければ、正しい結論に到達することができないということを考えるならば、このことは直ちに了解されるであらう。たとえば標準語への言いかえにしても、對應の観点にもとづかない言いかえは單なる翻譯におわり、決し

てほんとうの言いかえにはならないであらう。ほんとうの言いかえをするためには、一つの方言体系のその部分と、他の言語体系のある部分との間に正しい對應關係を見出さなければならぬ。そのためにはまず、終局の意味ではなしに、それぞれの言語のかたちに即した忠實な言いかえから出發すべきである。（一）

（一）たとえば盛岡方言のナツテモカワネガツタ（「なんにも買わなかつた」に相當する）のナツテモをただちに「なんにも」であると考えるのは、十分に對應關係をつかんだものとは言えない。かたちに即して忠實に言いかえるならば、ナツテモは「なんでも」なのである。じつさい埼玉縣（たとえば高麗（コマ）村）では、時分どきなどのあいさつに「ナンデモ無くてお氣の毒だ」という言い方をする。

かくすることによつてはじめて方言の正しい認識もなりたち、教育的効果も十分あげることができるとであらう。（二）

（二）對應關係において言語をみるという態度は、たんに方言研究のばあいにとどまるべきものではなく、ひろく言語一般の研究にまでおよぼすことができるであらう。また、對應關係と言つても、視點のとりかたにより、同じ言語体系のなかにも大小さまざまな對應關係を設定することもできるわけであるが、今はしばらく方言についてだけ論議を進めることにしておく。

さて方言が以上のような對應關係において捕えられるとすれば、方言というものは一般に、かならず（すくなくとも）二重の對應關係におかれている、ということが明らかにになる。第一は標準語との對應關係であり、第二は他の方言との對應關係である。ここに、他の方言との對應關係のばあいは、おたがいの特殊性を強調することによつていくらでもこまかな方言區劃に分けることができる。また逆におたが

の共通性に注目しつつ、共通性だけをとりあげていくならば、ついに日本じゆうの方言を一括して一つの方言(？)と見なすことができよう。しかしそうなると、名目上は一つの方言であるが、實質的には、その方言はもうろん日本語、そのものなのである。一般にわたしたちが「日本語」について論じるといふあい日本語とは、じつはこのように、いちいちの方言体系がもつ特殊性を捨象して極端に抽象された日本語、一般なのである、と考えるのが具体的には正しいのであろう。してみると、方言の總和が國語であるという、一般に通用している考え方(3)は、單にそれだけではいささかくわしくない考え方と言うべきであらう。山田孝雄^{よしお}博士が、「日本文法學概論」においてこの通説を批判しておられるのはまことにものともであると思う(4)。

(3) たとえば、神保 格「標準語研究」57頁(昭和16年日本放送出版協會刊)「日本語とはすべての方言の總和に對する名前である。方言以外に別に日本語といふものが存在するわけではない。」

またたとえば、ソシュール「言語學原論」改譯新版二七〇頁「所の数だけ方言がある。」同じく二七三頁「方言なるものが、國語の全面積を恣意的に下位區分したものに外ならぬと同じく、……」

(4) 同書12—13頁(昭和11年寶文館)

「これらの論法に従ふ時は日本人の個々のみありて、その以外に日本人といふものなしといふ結論に到達すべし。これ恰も野蠻人が、甲の馬乙の馬といふことを知り得て馬といふ概念を有せざるにも似たり。(中略)吾人は個々の馬の知識を有すると共に一般的に馬といふ概念を有する如くに、個々の方言の存するを認むると共に日本語の本體と認むべき共通語といふものゝ概念的に存するを認むることは明かなる事實なり。この共通語は個々の方言の總和にもあらず、又一の方言にもあらずして、即ち全國共通

に行はるべき性質を有していづれの方言にも屬せざる多少概念的性質を帶ぶる語にして、それが教育の普及と文化の發達とによつて生ずべき筈のものなり。」「それが」は原文のまま)

なお、時枝誠記(もとき)「國語學史」三頁(昭和15年岩波書店刊)・同「國語學原論」一四三頁(昭和16年岩波書房刊)参照。

4 方言に對立するもの

さて各方言の間の共通性だけに注目しつつ抽出された「日本語一般」なるものを何とよぶべきであるかというに、前にふれたとおりこれを日本語という名前ではよぶことは許されるであらう。すなわちわたしたちが一般に「日本語」とよぶときの實體は、前述のような性格をもつた「日本語一般」である、と理解することが第一の解決である。

つぎに第二の解決としては、これを「標準語」という名前ではよぶことも考えられる。じつさい標準語といわれるものの實體は、方言の方言性を捨象した「日本語一般」と實質的には一致するのではないだろうか。しかしながら、方言の立場からなげめるとき、日本語一般をただちに標準語という名前ではよぶことは好ましくないようである。しずかに考えればだれでもすぐ氣がつくように、標準語という名前はけつして方言の反對語ではない。

それにもかかわらず、標準語と方言とがあたかも一對のことばであるかのように誤解(？)された結果、方言はいやしいものであるとか、はすかしいことばであるとかいう固定觀念がいつのまにかゆきわたつてしまつた。たしかに方言は、あるばあいには、使うことを恥じて

いいことばにちがいない。しかし、一般に方言が標準語にくらべて低級であるとかいやしいとか考えるのは明らかに不當である。思うにそう考えさせるに至つた責任は、「方言」のがわには少なく、むしろ「標準語」のがわに多いのではあるまいか(1)。そういう名前をつけようという對立物をみとめるに至つた考え、そのものに根本の責任があると解するのがなお一層適切なるように思うのである。

(1) この邊の事情については、明治三十五年に組織された國語調査委員が調査方針の第四として、「方言ヲ調査シテ標準語ヲ選定スルコト」(傍點は見坊)を決議したこと。その後の方言調査が標準語への手段としてだけ行なわれてきたこと。方言がいつでも標準語と對立させられて「方言か標準語か」という形でもつばら問題が出されてきたことを考えるとよく理解されるであらう。

たとえば國語國字問題に關する議論の進歩した最近でさえ、「標準語と方言」という角度からだけ諸家が議論を上下させているありさまで、標準語の直接母胎になるはずの共通語にはほとんどふれることなくしに議論が進められている。一例を朝日新聞社の國語文化講座第一卷「國語問題篇」(昭16年)にとると、このなかに「標準語と方言」の題目があり、また「標準語と國語教育」(昭15年岩波書店刊)にも同じ項目が見られる。これらはいずれも編集者のえらんだ題名かもしれないが、そこにこの問題に對する當時の支配的な考え方の反映をはつきり見てとることができるのである。しかしながら、これは問題の出し方が全然ちがつていたのであつて、正しくは「標準語と共通語」あるいは、「共通語と方言」という形で問題が出されなければならない。

共通語という中間項目をとびこえて「標準語と方言」をただちに結びつけて論じるのは、いささか論理的でないと言うべきであらう。早く大西雅雄博士も言われたように、がんらい標準語と方言とを對立させて考えることは誤りであるにもかかわらず(參照、石黒魯平「標準語」53 頁、昭和25年明治圖書)、國語調査會がこうした形で問題を提出して以來、「標準語」ということばの生みの親である上田萬年博士が「國語のために」啓發宣傳をされたのとあいまつて「標準語と方言」「標準語か方言か」という考え方は今日にいたるまで容易に改められていない現状である。

しかしながら、かく言うことによつてわたしは、標準語という名稱そのものがあやまつている、と言おうとしているのではない。また標準語と方言とが絶対に結びつけて考えられるべきではない、と言おうとしているのでもない。わたしの言いたいのは、方言が問題としてとりあげられ、しかもそれに對立する何かの概念が必要であるとすればその對立概念は標準語ではなくて、まず第一に共通語であり、その共通語がある程度確立されてはじめて、共通語を直接の地盤として標準語が考えられるのが順當である、ということなのである。また逆に、標準語が問題としてとりあげられ、しかもこれに對立する何かの概念が必要であるとすれば、その對立概念は方言ではなくて、まず第一に共通語であり、方言は共通語を媒介として間接に標準語と結びつくべきである、ということを中心としたのである。すなわち以上で明らかにように、標準語、方言のいずれのがわから出發して考えてみても、

この二つの概念は直接に對立概念として結びつくべきものではなくて、どちらも共通語を媒介として間接にむすびつくべき性質のものである。したがつて、「標準語と方言」という考え方や「標準語か方言か」という問い方は、問題を混亂させる以外のなにものでもない。

以上の次第であるからして、山田博士の「標準語」といふ語はもと Standard Language の譯にして言語を異にする異民族の集合國家に於いて政治的にその國家の議會、法令などに用ゐる標準的の語をさすものにして今いふ如き方言に對しての共通語をさすに用ゐるは不當なりとす。」(前掲書13頁。傍点は見坊)という意見、ならびに石黒修よしむら氏の「標準語は方言と對立するものでなく、方言が地方的なのに對して、これは國家的である。」(國語文化講座「國語問題篇」79頁。傍点は見坊)という意見は、こんにちますますはつきり承認しなければならぬ基本的な考え方と言わなければならない。

5 標準語から共通語へ

こう考えてくると、標準語という名前はこのさいほかの適當な名前に切りかえた方がことがらをはつきりさせるためには望ましい。標準語という名前が、共通語の規範性を強調し、これを精練したものをさすということは、もはやわたしたちの學問的常識であるが(たとえば小林好日「國語學通論」16頁)まだ一般には普及していないようである。しかし、國立國語研究所の發足とともに、標準語という名前の代

りに共通語という名前がだんだん使われ出した。これは早急に一般教育者ならびに大衆のあいだに普及させるべき名前であり、かつ、考え方であると思う。

わたしのうちに、共通性を地盤とした特殊性を軸として方言を考える方法によれば、方言に對立するものは當然共通語であつて標準語ではない。がんらい方言という漢語は價值判斷的なものではなくて、むしろ單純に記述的な意味を持つものであることは、新井白石(「東雅」總論)や吉田松陰の用語例からも推察することができる。しかるに明治時代になつて、本來的に價值判斷を含むことばである「標準語」が方言と對立することになつたために、方言ということばが必要以上に非價值的な言語として意識されるようになった(一)。これは方言にとつては甚だ不幸な運命であつたと言わなければならない。

(一)もちろん、江戸時代の「方言」研究およびそれ以前の方言研究において、方言現象が價值的なものとしてとりあげられたわけではないと思うが標準語と對立させられない方言は、むしろ「通俗語」としては珍奇な田舎詞の意義で使ふのが慣例であつた(「東條操「方言と方言學」三四二頁)と考えられる。

これは單に方言にとつての不幸な運命であるにとどまらず、教育上にもいちじるしい悪影響をおよぼし、一方では方言を不當におとしめると同時に、他方では東京弁を必要以上に價值つけてしまつた。もちろん方言には多くの特殊性があるから、特殊性が問題となるような場面では當然使用すべきでないが、それは決して方言そのものの全面的否定を意味するものであつてはならない。

方言についての必要以上の自己卑下はだちにやめるべきである。標準語の標準性は、それが何よりもまず共通の言語であるというところに認められると考える方が一層適切ではあるまいか。

教育的取扱いを強調すれば、方言の卑下的抹殺的な取扱いも一應はひとめてもいけれども、教師が腹のそこからそう信じていてはいけない。方言を教育の場面において扱うさいに、わたしたちはもう少し觀念の整理をしてかかる必要がある。そればかりではない。觀念の整理がついたならば、上述のような否定的な取扱いによらなくても、方言矯正の目的は十分達成できるという自覺をもつ必要がある。すなわち、石黒魯平氏も「標準語」の中でそう言われるように、方言と共通語とを適切に使いわけることが根本問題なのであらう(2)。さらにつきつめて言うならば、方言の方言的性格に自覺の目を向けることが一層根本的な問題なのであらう。

(2) 東條教授が要約されたように、國語教育における方言の取扱い方には基本的な三つの考え方があつた。

- 第一は標準語専用論であり、これは裏返すと直ちに方言追放論となる。
- 第二は標準語・方言併用論であり、一名二枚舌主義とも言われた。
- 第三は方言誘導論とでも言うべき意見で、自然に標準語化している方言を巧みに誘導して標準語に近づけようというのである。(「標準語と國語教育」10頁)

しかしわたしは、教授とともに、第一、第三の意見に對してはうたがいを持つものである。

以上につけくわえて、たとえば方言がはつきりとされるのは共通語を使うべきときに方言をつかつた時だけであること、教科書、ラジオ

オなどのことばは、それさえ知つていれば全國どの土地へ行つても共通に感情・意思の内容を表現・理解できる共通語であること。また共通語を知り共通語に熟達することは、社會的人間としてよりよく生長するためにも必要なことであること。などを説明し、かつ例示することによつて、教育的効果はさらにあがるのではないかと思うのである。

付記 方言についての特異な意見としては、時枝博士の「國語に於ける變の現象について」(國語學第二輯昭和24年6月養徳社刊)を見られよ。

付録

參考までに、諸家の方言の定義を列挙しておく。

- (1) 日本文學大辭典「方言」(東條操執筆)「狹義の方言」(「地域的方言」(Local Dialect)「國語が使用地域の異なるため、各地に於てそれぞれ別の變遷をとげて、遂に若干の言語團に分裂した時、その分團の言語全體を方言と云ふ。(中略)「廣義の方言」一般に或る原因のため一言語團が若干の小言語團に分裂した場合に、その分團の言語を方言と云ふ。(中略)たとへば、學生言葉、職人言葉の如き階級語もその一種でこれを階級方言(Class Dialect)と云ふ。」(第三卷 六七―一頁)
- (2) ソシウル 3註(3)に引用した。
- (3) ドオザ「方言は一言語の低位單位である。(松原秀治譯・「言語地理學」3頁昭和13年富山房)
- (4) 橋本進吉「學問上には、その地の言語全體をさしてその地の方言といふのであつて、他の地の言語と一致する部分をも一致しない部分をも含めていふのである。」(「國語學概論」53頁昭和21年岩波書店)
- (5) 東條 操

- (5.1) 「一國語が使用地域の相違によつて發音上、語彙上、語法上に於て相違ある若干の言語團に分裂した時に各團を方言と云ふ。」(「方言と方

言學」6 べ昭和13 年春陽堂)

(5.2) 「方言とは國語が各地において、その地方的事情のためにそれぞれ別な發達をとげて、互に相違を生じた場合の相對的名稱である。」「(増補國語學新語) 四〇三 べ昭和23 年東亞出版社)

(5.3) 「要するに、方言にはある地方の全言語体系を指している時と、その体系の中の一部分特にある特殊な單語を指している時と二つの場合がある。(中略) 本書では地方の言語体系をさす場合に方言という術語を使い、特殊な單語などをさす場合に俚言という術語を使うこととする。」「(方言の研究) 2 べ昭和24 年刀江書院)

(5.4) 「まづ最初と言つておきたい事は、われらのいふ方言はある一地方の言語体系全体を指すものであつて、その中の一つ一つの單語だけを意味してゐないといふ事である。」「第二に言ひたい事は、われわれは「方言」を組織する要素としてその中に標準語と同種の現象をも含ませてゐる事である。」「(國語學第四輯5 べ昭和25 年刀江書院)

(6) 小林好日「方言は地域によつてちがふ國語であり、(方言の總和が國語である。)...」(「國語學通論」16 べ昭和19 年弘文堂) なお同書三七七べには、「方言は言語が地域的に分れたものである。」ともある。

(7) 安藤正次 2 註(1)に引用した。

二 方言矯正の原理と方法

1 方言矯正の原理

方言がなにもものであるかということについては、從來多くの議論がつくされてしまつたようであるが、私はこれを二つの代表的な意見に要約すると同時に、あたらしく、「對應」の観点から方言の概念を整理してみた。これについては一でのべたとおりである。二において私

は、この観点が、方言の矯正にあたつてどのように生かされるべきかを説明しようとおもう。

方言矯正の問題は、方言それ自身の問題とともににはや説きつくされてしまつた感がないでもない。しかし、方言を矯正するさいのいろいろの手續きが、そこから出てくる方法論的な面については從來ほとんどとりあげられなかつたのではあるまいか。また、方言の矯正と言つても、多くは單になまりの矯正とか、特殊な單語の矯正にとどまつており、文法現象とかアクセントとかになると余り問題にされなかつたのではあるまいか。以下において私は、これまで説きつくされたと思われる点にはほとんどふれることなしに、もつぱら、これまで余り取り上げられなかつた点について私見をのべようとするのである。

方言矯正の原理の第一としてあげたいものは、その土地の方言の「言」的特色をつかみこれを正しく位置づけることである。

方言矯正の方法や焦点を論じることとはもとより重要なことであるが、まずかれらに、自分たちの方言の方言的現象に氣づかせることが、方法以前の方法論として最も重要なことではあるまいか。いや、そもそも教師自身がみずからそうした方法の必要性を自覺して、自分のまわりの方言の一般狀況をはつきりみとめることがもつとも根本なのである。——ということとはつまり、單にある土地では、「さか立ち」のことをツンムグレンコ(たとえば岩手郡葛巻町)ということか、またある土地では、「かばん」のことをガバヌ(たとえば下関伊那普代村)ということか、また宮古市のアクセントは奇妙だとかいうふう

方言現象の一部を任意にしかも孤立的にとりあげることの意味してゐるのではない。そうではなくて、自分の方言の、たとえばアクセントが客觀的にどんな構造をもち、どんな位置づけが、全國的には可能であるのか、ということのみならず、ひとにも知らせることが望ましいということを強調したのである。例をアクセントにとると、縣南地方のアクセントは東京アクセントに遠く、縣北地方のアクセントはこれに反して、東京アクセントにすつと近いという、客觀的事實がある。教師はこれを利用して、ある地方の人が不當に卑屈な氣持をもたないように適切な注意を與えてやることができるわけである。たとえば、下閉伊郡、九戸郡のアクセント、ことに九戸郡のアクセントは客觀的に言うとき、岩手縣では一番模範とすべき資格をもつにもかかわらず、主觀的には一番卑下すべきアクセントというふうに意識されている。こうした不幸な意識は、すみやかに取り除かなければならぬいし、また取り除くことができるのである。

方言矯正の第二の原理は、方言を、あい對應する言語体系としてみとめる見方から必然的に出てくる。たとえば文法現象について考えてみよう。

岩手縣では、「高くない」ということを一般にタゲグネのように發音する。しかしこのごろは、共通語の言いかたにならつて、タガグネのように言う人も多くなつた。一見して、タゲグネはタカクナイのなまりである。しかしながら、じつはそうではない。タゲグネはタカクナイのなまりだと考えるのは推論のしかたがややまつてゐる。

それはあくまでも方言の總括的な言いかえの問題、全体として意味する内容の問題であつて、かたち、即ち、對應關係の問題ではない。かんとんに結論を言うならば、タゲグネのゲは、タカイのカイのなまりなのである。すなわち、タゲグネは、これを共通語に直譯するとタカイクナイとなる。（このことは、音韻と文法との兩方から証明することができる。）

こう言う見方は、たとえば中學校の文法の時間などにきつそく効果をあらわすであろう。方言社會における文法教授を効果的にするためには、たんに教科書にある説明の取りつぎをするだけでなしに、隨時適當な方言形を生徒に思い出させ、あるいは共通語を方言に言いかえさせるとか、逆に方言形を共通語に正しく———言いかえさせることによつて、自分のことばに自覺、反省の目をひらかせることがきわめて望ましい。ただし、そのさい、いちいちの活用形とか、ひとつひとつの助詞、助動詞を要素的に取り出して孤立させるのではなく、それらを含んだ具体的なまゝとまつた言いかた、たとえば打消の言いかたを含むまゝとまつた方言文から出發し、そこにまた立ち歸るようにすることが必要である。極論するならば、私は、文法教授はつねに方言を教材としてなされるべきだと思うのである。

2 方言矯正の方法

方言矯正の方法は、前述の二つの原理が体得されたならば、もはや

十分であると言つてよいと思う。あとはこれの實踐だけであるときえ言いたいが、「方法」への補足的な注意を二三つけくわえておきたい。

(1) 方言を矯正するにあつては、正しくない部分だけを要素的にぬき出して矯正するのではなくて、その單語全体、できればその單語をふくむ文全体に即して矯正すべきである。たとえば、イガネ（「行かない」）と言つたときに、ネはナイのあやまりだと指摘するかわりに、すくなくともイカナイと訂正する、といったぐあいである。

(2) 一部分から全面的に、という順序をふむこと。これは特に小學校のばあいに必要と思うが、方言の矯正は、方言意識の濃淡に應じてなされなければならない。自分でもすぐ氣がつくもの、一つなおせば應用のきくもの、日常生活に關係の深いものなどから始めるべきであろう。

(3) いちじるしい点からまず矯正すること。これは、その方言の特殊性をまず消して行く、ということである。

たとえば、アクセントについて言うと、岩手アクセントの特殊性は次の二点にあるとおもうから、それを目立たせないようにするのがよい、ということなのである。その二点とは

第一 完全に平板式のアクセントがあること。（例、コレワハナデス、における、コレ、コレワ）

第二 中高型、尾高型のアクセントでは、そのなかの一音節だけが高くなること。（例オモシロイ、ゴザイマス）

實際の談話のさいには、第一と第二とがいつしよにあらわれるのが普通であるから、「岩手方言では、高くなるとすればかならず、一音節だけが高くなつて、それ以外はぜんぶ完全な平板式に發音される」と説明した方が實用的であろう。（例、ソナコトワアリマセン）

とにかく、以上の二つの特色（？）を消してしまえば、かりに東京アクセントそのままではないにせよ、すくなくとも岩手アクセントではなくなる。（じつさいには、かくすることによつて、縣南地帯以外は、ほとんど東京アクセントそのものにまで近づくのである。）その具體的な方法としては、一般に第二音節からかならず上げて發音するようにして、途中から下げるところだけは、いままでのように下げればよい。（例、ソナコトワアリマセン）

後記 この論文の一は、國語學會公開講演會、盛岡第二回（昭和二年一月）における講演の草稿に加筆訂正したものである。本學授教島稔氏の示教を受けたことを感謝する。また二は、雜誌「國語學」第四輯（刀江書院發賣）に掲載されたものの、要約である。紙數の關係で、岩手縣におけるアクセントの型の分布その他についての例説をはぶかざるを得なかつた。くわしくは同誌を参照されたい。

なお、一と二とは、もと「方言と國語教育」という題で執筆した論文の、それぞれ第二章、第三章にあたるものである。

付記 「圖書昭和25年6月號（岩波書店發行）にのつた、時枝博士の書評「日本語方言文法の研究」も参照されたい。